

文巻頭語 9
一段

宗教心と現代生活

第一

金子島次

唯物主義と根柢とすまるル此の社会主義
義に取つては宗教は個人の私事であつて必
ずしも社会生活の重要な要素ではなからぬ。現
在の社会生活の中心は他の一切の犠牲に供せら
れし現代生活に取つては宗教は中心をなして
以て單純に宗教と論じること其の二と云へば、恐
らく時代錯誤の極である。

949 (通頁)

五頁

カラ始メ

現代的な現代人への取組は、宗教の如きは、もはや
 也久しきと歩みへる高きとせざるべき也。其の
 一、現代に於ては、宗教は果して全く消滅し
 たりと云ふべし。宗教は道徳の遺物に過ぎ
 ざぬべしと云ふ。現未來に於ては、人由は宗教
 ありしに純粹な無宗教とし、生活するも、心
 安らぐも、やふくと云ふこと、人由生活に關す
 る一種重大な問題に存す。と考へらる。

此れはしるべき書簡の問題に於て宗教とは何

(岩波書店原稿用紙)

宗教

心也。宗教の根柢は明白に於ては、我々は
 即ち現代生活と宗教との關係を考察し得る
 べきであらう。然り即ち今人の多數は取つては、
 宗教の如きは最早解釋しつくと云ふ由なる也
 一、今頃殊更しく宗教とは何ぞと問ふ如
 如きは、餘りにも時代おとすに或る業のやう
 に考へられり。

然るに其の見る所は、宗教の解釋も亦
 義はむ難かるべし。宗教は道徳の遺物に過ぎ
 ざる也。宗教の存在は、全く現代の生活に
 關するも、今日

別行

新象本位の考察の方式と比較して、途上の確
り確実のあり又結果のあり、故所とて、
あり。我々は先づ斯くの宗教的推論の本質
吟味と考察の必要あり。斯くの宗教的推論の本質
宗教意識の如何なるに成りたるか、
林——ニ無くして宗教意識は成りし時あり
といふ素朴中、哲學的に言へば、人由り本質の
所有する「價値意識」又は「諸價値」のありを
即ち一切の實際の價値、道德的價値、藝術的價値
並に科學的諸價値等、ニ等一切の價値意識也

(岩波書店原稿用紙)

理想

の七の宗教的意識の成りたる地盤あり
素朴あり。道德的價値と稱し、
日。道德的諸價値乃至道德的諸意識として存
在するに、ニは意識的推論に依りての直接
意識的要素あり。此の道德的諸價値ニは、
如何なる力と以て、ニも遂に絶滅する可からず
直接の推論あり又事實的存在あり。切
論のニは平生抽象的と道德的と抽象的に推論
するに依りてあり。我々が日常推論するに、
具體的あり、ニの推論は、ニの推論は、

中、人向、事、の、人、向、は、如、對、の、餘、々、心
 以、絶、對、運、也、と、認、識、し、對、し、て、過、也、多、し。 幸、故
 の、天、才、は、也、と、本、の、理、想、也、有、し、 或、者、は、或、時
 殊、有、り、向、い、し、又、他、の、者、は、如、く、 殊、有、り、他、の、不
 同、い、し、 其、理、想、の、絶、對、運、と、体、験、す、る、事、も、同、く、
 也。

斯、の、絶、對、の、運、也、未、し、人、向、に、向、つ
 る、必、然、的、事、事、の、理、想、を、し、る、所、の、一、体、験、也、實
 現、と、其、向、い、得、令、也、多、し、二、と、也、の、事、も、心、し、り、
 也、亦、有、り、也。 絶、對、的、の、理、想、運、也、明、確、に、体、験、す、

(岩波書店原稿用紙)

九、亦、有、り、也、等、の、体、験、と、心、也、此、等、と、結、核、す
 也、如、士、及、婦、の、体、験、也、行、は、れ、也、或、は、諸、運、也、体
 験、の、向、い、細、如、統、一、の、体、験、と、心、也、或、は、諸、運、也、体
 験、の、大、体、験、也、是、に、心、也、實、地、と、心、也、核、心、也、
 其、一、の、事、也、也、運、也、の、理、想、は、心、也、核、心、也、
 如、士、及、婦、の、理、想、也、也、

各種の

第四

絶、對、的、運、也、體、験、の、混、沌、状、態、也、統、一、的、事、也
 對、價、也、體、験、也、亦、生、ず、順、命、は、亦、亦、心、前、段、に
 地、說、し、也、也、亦、亦、心、前、段、に、地、說、す、

身に形式的又属理的解釋のあり、其の本質は
 未だ具體的に未だ説明されざるなり。故に如き
 更に進んで具體的に宗教意識の発生及び存続
 を考へて見たい。

宗教に生活意識の根本に存する一種不可解
 神秘の存在。此は宗教意識の発生地の地盤の如し
 と言はれり。私と此の解釋に於して異存は無
 い。此の根本義に於ては一種深刻の存在に
 是れ未だしく宗教意識の発生第一歩の如しと考
 へらる。

(岩波書店原稿用紙)

と解釋して見たい。前段に概説した各種の
 宗教意識の発生地として歸する所なく、
 此ら宗教意識の無政府状態が出現した如き
 未だ、我々の生活意識の根柢に一種ラヂカルな
 懊惱の存在を感心しめ、斯くの如き例一は、
 新羅の如き南の古の人生に對して一種根本的
 な絶望を感ずるといふ如き或は一ポラトシ
 ンに至善の境地に於ては、寧ろ信じて一
 ヲラトスル死期に於ては、曰くラヂカルな
 宗教意識の発生地如き、いつれも宗教意識の

夢の機縁

此亦也破壊也意味下とちりて二心
 到致すべしと云ふと吾等と心感せし
 べし次は云ふ。
 常教意識の発生と云ふ所也。心
 境の眼と云ふは、心と境との合一を
 謂ふ。此の合一を、常教意識は、
 本質の合一と云ふ。換言すれば、
 常教意識は、本質の合一と云ふ。
 例として、心と境との合一を、
 常教意識は、本質の合一と云ふ。
 例として、心と境との合一を、
 常教意識は、本質の合一と云ふ。

(岩波書店原稿用紙)

又時代の常教意識とは、又は十九世紀
 初頭の心と境との合一を、常教意識は、
 本質の合一と云ふ。換言すれば、
 常教意識は、本質の合一と云ふ。
 例として、心と境との合一を、
 常教意識は、本質の合一と云ふ。
 例として、心と境との合一を、
 常教意識は、本質の合一と云ふ。

註

夢

斯レニ常故の意識は絶対體に之の無條件の
 歸依の如し、常故の意識は甚しく神故の如
 二とて、自然の如し、結果の如し、無
 自己の如し、二とて比較し、無此に大之、
 他は体檢する。絶対體は飽水の神故の如
 不可思議の如し。神故の如し、不可思議也、
 絶対體の如し、合致する如し、特殊の如し。
 特殊は無感又は何感の如し、其の本、神故の
 不可思議の如し。絶対體は體檢する、
 神故の無感の外あり。

(岩波書店原稿用紙)

常故の意識又は常故の心は、本に二れ、
 之れあり。二れは、本に重大なり、
 殊に二れあり。即ち前段の記述は、
 故心の發生に、南あり、北あり、
 實地に就いて解釋する、常故の心は、
 信の如し、神の如し、信の如し、
 信の如し、神の如し、信の如し、
 此の如し、神の如し、信の如し、
 二とて、信の如し、神の如し、
 常故の意識とは、簡單に解釋する、
 絶対體に

5 = 2 別向題として、二、三は歴代聖學の概略
 の立脚地から世界史の概略を説く。歴代史の概略を
 出来の緒から取り簡潔に概略して七二。
 斯の、特殊な立脚地から我々の人向宗教を
 成り済ませるべき大略の階級に分別することを出
 来。等論歴代と同ト、在代中代並心は近代
 如九九の如し。
 等論歴代古代は近代の、人の生活の如き如き
 七二の事柄の如き事柄の如き如き如き如き如き
 活に於て現実と理想と十の一に調和し、
 (岩波書店原稿用紙)

其の例

し、矛盾と感とありて七二。歴代は近代は
 一、般に宗教と現実とは一線し、現実が宗教
 の裡に存し、又宗教は現実の裡に存し、二者の
 善悪が調和し、等論の如き如き。古代は
 二、其の事柄の時代から扱を著し、差別の
 如し。等論善悪の古代は近代は、現実の優越性
 論の如し。善悪の如し。一也。結句也。如き如し。
 此二の如き矛盾も不調和も感も如し。七二。現
 實生活と善悪の如し。如し。後述の如き如し。七二。
 七二。如し。古代人は、一、般に解明の如き如し。
 七二。

司

18
5. 絶対価値の論議は、
その中心は、今日から
価値論は、
2. 著者も、
に相違あり。美しく貴い現象生活は、
7. 全く虚無にして、
い、随うに全価値生活の統一といふ大事を、
存に取つて、比較の軍艦を、
とらふ。絶対価値論は、
4. 如く、
何等、
(岩波書店印刷用紙)

や、
儀に、
若し、
鮮明に、
恐と、
の近代生活は、
く、
宗教生活と、
その、
最即ち、

世の中は混沌としたものである。たとひ此等には
一と異へよと欲しむ。此の混沌状態を整理
するとは、未だの容易なる事である。斯くして
現代の政治は、~~経済~~ ^{全体}と統一すべき状態に達し、
宗教生活の本質は、人心を統一する事である。此
は、中世の純宗教時代の出現と反対
に、今日には、~~宗教~~ ^{現代}の出現と反対
に、~~統一~~ ^{統一}の統一である。

第六

斯くして現代は、~~統一~~ ^{統一}の統一である。

(岩波書店原稿用紙)

現代生活の時代である。若し現代人の意識の
根柢は、高貴の宗教的良心に在り、~~統一~~ ^{統一}の統一である。
現代は、~~統一~~ ^{統一}の統一である。懐疑時代である。
諸價値観の統制の喪失、~~統一~~ ^{統一}の統一である。
世の中は、~~統一~~ ^{統一}の統一である。統一である。
この混沌時代は、懐疑時代である。統一である。
既成宗教の残骸や、~~統一~~ ^{統一}の統一である。統一である。
統一である。統一である。統一である。統一である。
統一である。統一である。統一である。統一である。

